

陳舜臣さんを語る会通信

NO.59

Feb. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年2月1日

中国古典紀行『英雄ありて』

『英雄ありて』(1983 講談社)は、刊行順で、「三国志の旅」が『中国古典紀行 1』(1981.5)、「唐詩の旅」が『中国古典紀行 2』(1981.6)、「西遊記の旅」が『中国古典紀行 3』(1981.8)、「水滸伝の旅」が『中国古典紀行 4』(1981.10)、「史記の旅」が『中国古典紀行 5』(1982.1)で、いずれも講談社刊です。更に、『英雄ありて』(1993 PHP研究所)があり、文庫版『英雄ありて』(1986 講談社)があります。また、集英社『陳舜臣中国ライブラリー15』にも収録されています。

2、3頁では、NHKBSプレミアム『空旅中国 李白長江をゆく』からいくつかの話を紹介しています。なお、語りは宇崎竜童で、美しく楽しい番組です。オンデマンドでの視聴をお勧めします。(編集委員 橘雄三)

執筆の動機

PHP研究所版『英雄ありて』
「あとがき」から抜粋引用

杜甫の「春望」と題する詩に、

国破れて山河在り

城春にして草木深し

という有名な句があり、芭蕉も「奥の細道」に引用していることもあって、日本の読書人にも親しまれている。

「山河」とは、祖国のこと、中国の大地のことにはかならない。そこは歴史の舞台であり、背景であり、詩文に詠まれた対象でもある。そうしたことを頭に浮かべることなく中国を旅するのは、索然たるものではないだろうか。すくなくとも、私はそれを惜しみてもあまりあることだとおもう。

そんな人とともに旅をすれば、お節介ながら、ここにはじつはこのような歴史の故事がある、といった解説をしてみたい気になることであらう。なにも知識をひけらかすのではなく、あまりにも惜しいとおもうかなのだ。

本書執筆の動機は、そのあたりにあるのだが、もちろんただの旅のガイドのつもりではない。旅行するかどうかは別として、一人でも多くの人に、中国をすこしでも掘り下げた

ところで理解してほしいと思ったかなのだ。

『史記』と『三国志』

中国の歴史のハイライトは、なんといっても『史記』と『三国志』であり、正史といわれる二十五(二十四)とかぞえる説もある。史のなかでも、最も多くの読者をもつ。それは三位以下を、問題にならないほどひきはなした数字である。

なぜそうなったかといえば、三国以後の歴史も、すべて『史記』と『三国志』(一般に読まれているのは、それを読物ふうにした『三国志通俗演義』である)のなかに祖型ともいべきものがあるからなのだ。その意味で『史記』と『三国志』のみをとりあげたのである。

唐詩

中国詩文学の華は唐詩である。杜甫、李白、白居易などは、古来、日本でも親しまれてきた。平安貴族の必読書が『白氏文集』であったことはよく知られている。中国人の詩的情緒は、唐詩に凝縮されているといつてよいだろう。中国の詩は、「以て志を言う」ものとされてきた。唐詩を理解することは、中国的情緒だけではなく、中国人の志にふれることでもあろう。

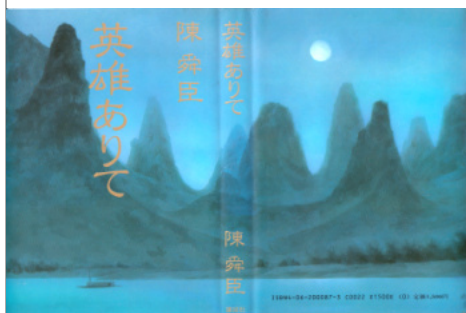
『西遊記』と『水滸伝』

民衆を知ろうとすれば、民衆の好むものに注目すべきである。小説、講談、演劇など、大衆娯楽のジャンルで、数百年のベストセラーといえは『西遊記』と『水滸伝』であろう。中国人のフィクションづくりの能力のレベルを、この二作ははつきりと示している。抑圧された時代に、民衆は空を飛んだり、万能の武器をもって妖怪を退治する話、あるいは理不尽な役人をこらしめるグループの話などは、拍手をもって迎えられた。

とりあげた歴史も詩も小説も、すべて古典であり、それらの古典の旅を通じて、引越すことのできない隣人のすがたを理解してほしい。両国の相互理解や交流にいくらかお役に立つことができれば、幸せである。

一九九三年十一月

陳舜臣



講談社版『英雄ありて』表紙
装画:東山魁夷『瀧江月明』

NHKBSプレミアム『空旅中国 李白長江をゆく』からいくつかの話を紹介いたします(1)

NHKBSプレミアム「空旅中国」は、ドローン撮影を駆使した美しい映像による紀行番組です。この回、宇崎竜童の語りも楽しい。



李白 唐王朝の宮廷へ

李白は西域に移住した漢民族の家に生まれた。やがて一家は西域から戻り、四川に移り住む。父は裕福な商人であった。李白は二十代半ばで四川を離れ、長江を下り、長江中下流域を歴遊した。この間、各地を旅して詩の腕を磨き、有力者に人脈を広げていった。遂に念願が叶い、宮廷から声がかかったのは、四十一歳のときで、家庭も持っていた。妻や子どもたちに見送られ長安へ旅立つ自分を描いた詩がある。



遊説万乗苦不早
仰天大笑出門去

皇帝にご意見するのが早くなかったのは口惜しいが空を仰ぎ大笑いしながら家の門を出て行こう

当時、全盛期だった唐王朝の宮廷に迎えられた李白、遅咲きだっただけに嬉しかったにちがいない。

溢れる詩才は宮廷でも認められるが、出る杭は打たれる。楊貴妃をめてた詩で下手をうった。紅い牡丹にたとえ、伝説の女神にたとえ、漢の時代の美女飛燕にたとえた。この三つ目が悪かった。飛燕は、非業の死を遂げた女性だったのだ。

また、こんな話もあったようだ。酔っ払って、玄宗の寵臣・高力士に鞋を脱がせたとか。なにかことがあると、妬み嫉みが噴き出し、李白は依願退職のような形で長安を追われた。正味一年有余の短い間であった。



桃花潭の村人との交流

長安を追放された李白は、十余年、四方遊歴の生活を続けた。そんなあるとき、李白のもとに一通のファンレターが届いた。差出人は、汪倫という縁もゆかりもない人物で、自分の村に招待したいという。李白は、村には桃の花が十里も続き、酒屋が万とありますという文句に誘われやって来たのは長江支

流、桃花潭。

ところが村に着いてみると、話が違った。あの「桃花」という川と「万」という名の酒屋があるだけ。してやられたと李白は苦笑い。

しかし、汪倫はじめ村人の心からのもてなしに李白は満足したという。村を離れるときの情景を描いた木彫りのレリーフが船着き場にかかけられている。別れるとき、李白は詩を歌い汪倫に贈った。第三、四句。

桃花潭の水は深さ千尺もあるというが

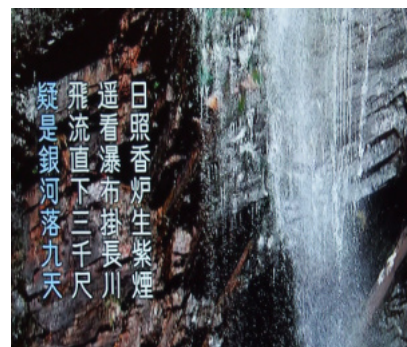
汪倫の見送ってくれる情の深さにはおよばないよ

李白は、有名な宮廷詩人だったとはいえ、村人たちのつきあいを心から楽しむ飾らない人柄だった。



望廬山瀑布

次は廬山です。

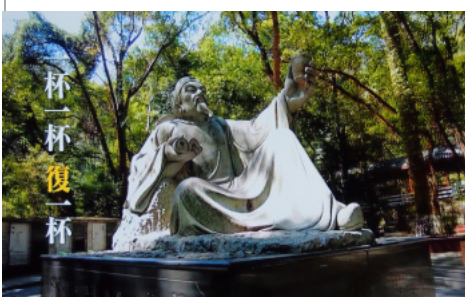


太陽は山を照らし、紫色の霧がたちこめる

離れてみると滝は長い川を立てかけたようだ

飛ぶような流れはまっすぐ九千メートルも落ちていく

これって銀河が天から落ちてきたんじゃないか (語り 宇崎竜童)



廬山にある李白の石像

NHKBSプレミアム『空旅中国 李白長江をゆく』からいくつかの話を紹介いたします(2)

罪人となり流刑地へ

李白に政治的な野心はなかったが、長江に遊んだとき、皇弟永王の幕僚となった。安祿山の乱がはじまったので彼も勤皇軍に参加しようとしたのだ。しかし、永王は兄の肅宗と仲が悪く、その命令をきかなかったため、賊軍として討伐を受け、幕僚だった李白も死刑を宣告される。死一等を減じられて夜郎(貴州)に流されることになった。



李白は若いときにも黄鹤楼を訪れている。しかし、今回は囚われの身。それなのに、黄鹤楼で宴会を開いてもらったらしい。罪人となっても、李白はビッグネーム。長江流域の有力者によれば、各地で宴会が開かれた。普通なら三ヶ月で行ける道のりを一年以上かけて長江を遡る。

屈子祠に詣で、屈原を偲ぶ

洞庭湖にそそぐ川、汨羅江。ここは、ある悲劇の舞台として知られている。李白が尊敬してやまない詩人がこの川で亡くなったのだ。詩人の名は屈原(原は字、名は平)。李白からさらに千年遡った戦国時代の人物。李白は詩の一節でこう讃えている。



屈平詞賦懸日月

屈原の詩は天に太陽と月を重ねたように輝く

李白はこの地を訪ねている。さながら聖地巡礼だ。屈原の運命を、李白は自分に重ね合わせていたのかも知れない。



李白のもとへ恩赦の使者が

李白を流刑地へ送る舟が、三峡を通ったのは冬だったらしい。李白は寒風吹きすさぶなか、何を慰めにしたのだろうか。

李白の舟は三峡のもっとも上流に入った。瞿塘峡だ。見えてきたのは白帝城。三国志で知られる蜀の劉備が没した地だ。李白は二十四歳で故郷をたち、長江を下ったときも、仰ぎ見たにちがいない。それから四半世紀あまり、再び仰ぎ見るわが身は流刑の罪人。



と、そこへ李白を訪ねてくる者がいた。都からの使者だという。聞けば、なんと恩赦の知らせではないか。朝廷が早魃(かんぱつ)を止めようと天に祈願したことにあわせ、恩赦を出したのだ。小躍りして喜ぶ李白。晴れて自由の身、再び都に上って活躍する道を開くのだ。



李白はこ

こで有名な詩を残した。大空を飛ぶようなリズムがあり、その喜びが伝わってくるようだ。

しかし、李白は、再び長安に戻ることはなく、長江下流の川岸の村でひっそりと生涯を終える。六十一歳。酒に酔って水面に映った月をとろうとして落ち、溺れ死んだといういかにも李白らしい話もあるが、それは伝説。実際は病死らしい。

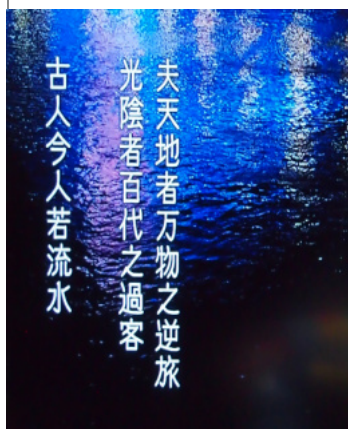


朝辞白帝彩雲間
千里江陵一日還
兩岸猿聲啼不住
輕舟已過萬重山

天と地は、万物を迎え入れる宿みたいなものだ

時の流れは永遠の旅人つてとこ
昔の人も今の連中もみな流れる水のように去っていくのさ (宇崎竜童)

夫天地者万物之逆旅
光陰者百代之過客
古人今人若流水



『英雄ありて』内容紹介

『英雄ありて』章立て			
章	節 ■は編集委員補足	陳作品	通信No.
史記の旅	大旅行家・司馬遷	『中国の傑物伝』	No.56 No.49 No.2
	大月氏への使者・張騫		
	合従連衡時代の遊説家		
	■蘇秦、張儀		
	壮士、一たび去ってまた還らず		
	■荊軻		
	旅に病んだ始皇帝		
	亡命の旅		
	■重耳(晋の文公)		
	劉邦の天下への道		
三国志の旅	三帝の故郷	『秘本三国志』	No.61 No.27 No.26
	■曹操、劉備、孫権		
	関羽の怨霊		
	赤壁の曹操		
	劉備と白帝城		
	丞相の祠堂 ■諸葛孔明		
	五丈原の対決	『諸葛孔明一族』	
	■諸葛孔明、司馬仲達		
	陶淵明の故郷 ■李白		
	李白と杜甫の友情		
成都の杜甫草堂			
唐詩の旅	白居易と江南の詩	『中国詩人李白』	No.49 No.33
	長安を憶う		
	■李白、荊叔、白居易、 杜常、王維		
	辺塞に歌う		
	■王翰、岑参、高適		
西遊記の旅	異色の詩人たち	『新西遊記』	No.36
	■李賀、李商隠		
	孫悟空の誕生		
	玄奘三蔵の旅立ち		
	神々とのたたかい		
水滸伝の旅	西域へ行く	『ものがたり水滸伝』	No.56
	オアシスの小国		
	竜人伝説		
	天竺の日々		
	パミール越え		
	庶民的な英雄豪傑		
	酒楼の巷		
	梁山泊		
	作者の故郷		
	山東の大漢		
	南方遠征		
英雄たちの最期			



江蘇省連雲港市にある「秦東門」碑
史記に記述がある 編集委員撮影



「水滸伝」物語終焉の地 六和塔
z.hangzhou.com.cn より



最強の旅行者「玄奘西域行ルート」PHP研究所版『英雄ありて』より
玄奘三蔵像は東京国立博物館蔵です